

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

### \*接写台収蔵

すばる室から譲渡され、収蔵した古い機器の中に表記の接写台がある。筆者が東京天文台恒星分類部にいた頃、実際に使ったもので、ずいぶんと世話になった懐かしいものである。現在ではスキャナーがあるのでこの接写台は無用であろう。と筆者は思うのだが、2〜3年前に国立公文書館のつくば分室を訪れた際、接写台を使ってマイクロフィルム化の作業が行われていた。その際、なぜデジタル化しないのですかと質問した覚えがある。その時点ではマイクロフィルムとして残した方がいいのだと答えられたことを思い出している。まだ全く無用の長物ではないのかもしれないが、少なくとも国立天文台で接写台を使おうというものはもはやいないであろう。

筆者の用途の多くは、壽岳潤氏に頼まれたファインディングチャート作成のためにパロマー写真星図を複写で写真を撮り、ファインダーで見る実際の星野のスケールの写真を作ることであった。この作業は図書室から写真星図の借り出し、接写撮影、その後の暗室作業である撮影したフィルムの現像、星野を印画紙に焼き付ける作業と結構な時間が必要で、徹夜で作業をしたことも何度かあった。その他にもネガフィルムの古い写真を複製する場合にもよく使った。

この接写台は、日本光学製でコンパクトな箱(写真1)になっており、箱の下部には支柱を立てるネジがついており、箱を開いて写真2の留め金を止めて開いた箱を伏せれば台になったのである。



写真1 コンパクトな箱状になっている



写真2 留め金

写真1の箱の中に必要な道具が収納されていて、組み立てて使用するようになっている。写真3が箱に収納された道具であり、③が繫いで使う2本の支柱、④がカメラホルダー、⑤が接写レンズホルダーである。そして箱の中にはレリーズが入っていた。それらは非常にうまく収まるように工夫されていた。レンズはマイクロレンズが用いられた。また、箱にはカメラを収めるようにはなっていなかった。



写真3 箱を開いたところ

実際にカメラを載せて使用する姿が写真4である。この両側から照明したことは言うまでもない。



写真4

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)